

海 暗

著者 有吉佐和子

発行者 檉原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
郵便番号 一〇二

印刷 凸版印刷

製本 加藤製本

函 加藤製函

定価 七五〇円

昭和四十三年十月一日 第一刷
昭和四十四年十一月一日 第三刷

海

暗

比較的傾斜のない場所に頃合いのタミの木を見つけると、オオヨン婆は懷から古新聞を引張り出し、くしゃくしゃと揉んで木の根元に押えつけた。快晴が続いていた。今日は西風で海は波が高いけれども、山の落葉は乾いている。オオヨン婆は背負い籠の中から細竹を編んだ小さな熊手を出すと、タミの木のまわりの落葉を掻き集めては根元に積み上げていった。古新聞がすっかり見えなくなるまで枯葉を集めると、また背負い籠の中に手を突っこんで、今度は小型のバケツを取出し、腰をのばして、ボロ沢の方へ降り始めた。岩の多い山だ。樹木もびっしり生い繁っているのだが、降りるほど疎になつて、オオヨン婆の視界は次第に明るくなつた。

ボロ沢は里から山道を歩いて一時間ばかりのところにある川の名前なのだが、特にボロ沢と名差されてゐるのは恰度水が穏やかに憩う中流の辺りであつた。オオヨン婆が山を登るときにはいなかったのに、子供たちが数人川べりの叢のかげに蹲つていた。彼らは、オオヨン婆の姿を認めると、飛上つて口々に言つた。

「やっぱりそうだ、オオヨン婆だんきや。草祀くさまつり神さまの前の草は、オオヨン婆のあげたものだったんだ」

「何してるだ、オオヨン婆」

「お前めえらこそ何してる」

「ヨモギ摘つみだぞ」

「なして」

「餅搗つくんだんきや」

「なして。恵比寿えびす講か」

小学校初等科に通う子供たちには、恵比寿講という古い言葉は耳なれなかった。だが彼らはそれを聞いて返すよりもヨモギ摘みの理由の方を云いたかった。

「カツオドリの日は手が足りねエだから餅喰もちくわせるってよオ」

「菜さいを煮る手間がねエだから、草餅にするだぞ」

「ヨモギはビタミンがあるだからな」

「ボロ沢のヨモギは一番柔かで味がいいと母ちゃんが言ったぞ」

この島の緑は年中絶えるということがない。秋はヨモギが腰のあたりまで丈高く繁る。子供たちの説明で納得したのかどうか、オオヨン婆は黙って川べりに近づくと、手に提げていたバケツで水を汲みあげた。

「オオヨン婆は何しに来た」

子供たちの中にいた梅子が訊いた。オタネン婆ばあの長男の末子だ。オタネン婆はオオヨン婆の娘だから、梅子はオオヨン婆の九人いるとマゴの一人である。

「木を焼きに來ただんきや」

オオヨン婆は答えると、踵かかとを返していま來た道を歩き出した。山の中だから道らしい道があるわけではない。しかしオオヨン婆にとって一世紀の四分の三も駆け歩いている土地の中で、どの木も顔馴染みなら木の方でもオオヨン婆には愛想がよく、オオヨン婆が足を踏み入れると森も林も道を開いてみせるようだった。

「どの木を焼くだ、オオヨン婆」

子供たちはヨモギ摘みを中断して、皆で婆の後について登って來ていた。オオヨン婆は話好きだが無駄なことは喋しゃべらない。この質問に答える必要はないのだった。幼い子たちは訊いたことも忘れて、銘々かゝりに焼くに相応ふさわしい木を物色して歩いているのだったし、それこそ教育というものだった。若木は焼くに忍びない。木の種類によって焼いても役に立たない樹木がある。子供たちは山道をすばしこく駆け上りながら、自分だったらどの木を焼くかという考えに熱中して、山の木を一本一本注意深く吟味していた。

「あつたぞ」

「これだ」

オオヨン婆を追い越した子供たちが、根に枯葉を集めたタミの木を見付けるまでに長い時間はかからなかった。

「オオヨン婆、なしてこの木にきめた」

梅子が訊いた。彼女には納得しかねるものがあつたのだらう。タミの木は育てば一抱えできかないほどの大木になる木だった。それがまだ直径十五センチほどの若いうちに婆は焼こうとしている。

「枝の先を見る」

オオヨン婆は言葉少なく答へ、背負い籠の中からマツチを取出すと、根元に蹲うずくまって古新聞の端に火をつけた。それから小さな熊手を持って、辺りの落葉を火より遠く掻き散らした。子供たちは、梅子と同じように婆に云われた通りしばらくの間じっとタミの木の枝先を振仰いで眺めていた。婆が焼く木に選んだ理由が、そうしていれば自然に解けるように思われたからだ。

「葉の色が違うぞ」

男の子が一人、ようやく発見をした。

「オオヨン婆ばあ、なして葉の色が違う」

「あの葉の色ならばな、椎茸しいたけがうんとこき付くだんきや」

「なして」

「なしても、そうだんきや」

木の葉の色が違うのはおそらくタミの木の生命力が若くても萎なえた証拠であるのだらう。大木になる見通しを失った木を選んで、オオヨン婆は早目に根を焼いて枯らすことにしたのかもしれなかった。しかし、そういう理屈はオオヨン婆にはなかったし、子供たちも昔々オオヨン婆が婆の婆や婆のお父とうに聞いた通り、この葉の色は忘れまいと思うだけであつた。なしても、そうだんきや、というのが、

オオヨン婆の哲学だということを、島の子供たちは、よく知っている。

火が根元の落葉全体にまわって白い煙が立上るころ、云いあわしたように子供たちの姿が見えなくなり、オオヨン婆が遠くへ掻いた枯葉を両手で集めては火の上にかぶせて、灰と火と枯葉が堆く積った頃、そろそろと戻ってきた。みんなイガの中で肩を寄せあっている栗の実を、短いスカートや、シャツの裾などにかからめて持っている。

「オオヨン婆、入れていいか」

「おお。一所に入れるな。弾はぜるだから、伏せて埋めろ。下の灰に埋めろ」

「おお」

云われた通りにしたあと、子供たちはオオヨン婆の周りに集って腰をおろした。

「オオヨン婆、あのボロ沢は白子屋しろこやお常が何かしたって、知ってるか」

「おお、知らないでか」

「白子屋お常って、なんだ」

「そうめん流し、しただなあ」

「そうめん流しというのは、なんだ」

ボロ沢というところは、白子屋お常がそうめん流しをしたところだという知識は、この島の者なら誰でも持っているのだが、さて白子屋お常というのは何者か、そうめん流しとはどういうことなのかという具体的なことになる、大人たちでもなかなか詳しい話のできる者は少ない。だから、子供たちはこの機会にオオヨン婆から聞いておこうと思いついたのであろう。

「白子屋お常というのはお前、婿殺しの罪でよ、大岡さまが裁きなすって、この島の流人になった女だぞ」

「悪い女か」

「にやあ、悪いのは娘の白子屋お熊だ。これが自分の亭主をよ、邪魔に思つて殺しただ」

「なして邪魔にした」

「白子屋というのはよ、伊勢の材木屋でな、お常もお熊も大そうに贅沢したもんだ。金を湯水のように使うで、大きな身代も潰れかけたで、持参金持ちの婿をとつただ。五百両の持参金だぞ」

「五百両って、どのくらいの金だ」

「とんでもねえ大金のことだ」

オオヨン婆は、それから事細かく白子屋母子の悪事を説明してきかせた。もともと金が目当ての縁組だから、五百両以外は邪魔物で、それで婿を殺そうとしたのだという、子供たちは憤慨して、ひどい女だ、悪い奴だと罵り始めた。

「大岡さまもよ、おっそろしい女だといわれたぞ。それで娘の白子屋お熊は日本橋の袂で晒しものになつて鋸挽きにされた」

「鋸挽きって、なんだ」

「鋸を肩の上に当てがって、ぎいこぎいこと挽いて殺すだ」

「おっかねえ」

「なに、おっかねえことがあるものか。悪いことしただから当り前だ。江戸中の人が見物に来てよ、

誰も可哀そうとは云わなかったぞ。そのとき、お熊の着てたのが黄八丈だぞ」

「八丈島のか」

「そうだぞ。おかげでそのあとしばらくは黄八丈の値が下って、八丈島の人らは買い叩かれて往生したというぞ」

音をたてて栗がはぜ始めたので、子供たちはわっと立上り、しばらく火の中から栗を掻き出すのに夢中になった。

「火を散らすな。そっと出せ。栗だけ出すだ。馬鹿、火を散らすなと云うのが分らねえだか」

オオヨン婆は、子供たちが栗を掻き出してしまうまで喚き続けた。

焼栗を、ふうふう吹きながら、子供たちはまたオオヨン婆の周りに集って来た。オオヨン婆も、いつの間にか栗を掴んでいて、皮を剥きながら話を続ける。

「お熊は死罪だったが、親のお常の方は遠島で、この島へ来ただが、白子屋の商売もお常が亭主を押えて切り盛りしていたという腕ききだよ、どう取入ったか知らねえが、島へ来てからもよ、食いの着るもの本土から取寄せて何不自由なく贅沢していただ。藤の花見て歌の会したり、ボロ沢ではそうめん流しして島役人を接待した」

「そうめん流ししてどうするだ」

「そうめんを川上から少しずつ流して、川下で箸ですくって喰うだぞ。夏のボロ沢の水はお前、冷たくて、水は清水だ。何より贅沢な食いもんだぞ」

「うめえか」

「うめえにきまつてゐるでねえか。御蔵島は水がええだ。伊豆七島で清水の湧くのは、この島だけだぞ。島役人は喜んでよ、お常が本土へ帰れるようにはからっただ。お常という女は、才覚上手だったんだな」

「そうめん流しが、なして贅沢だ」

「なしても贅沢でねえか。その頃の島は今よりもっと食いものがなくてよ、今よりもっと貧しかったんだぞ。流人の大方は飢えて死んだものだ」

「なして、島の者が助けなかっただ」

「島の者もおめえ、腹一杯喰えるか喰えねえかというときだ、送りこまれる流人にもあ迷惑しただぞ」

「ふうん」

男の子が一人、考えこんでしまった。だが、オオヨン婆は白子屋お常の話を続ける。

「お常は本土へ帰ってから島の人に空豆を礼に送ってよこしただ。空を見て思い出してる、豆に暮せという意味だぞ。帰った流人で島へ礼を寄越したのはお常さんだけだぞ」

「オオヨン婆は、お常に会ったか」

梅子が訊いた。もしそうだったら、ヒマゴの梅子も少し自慢ができるような気がする。昔は食物が少なくて苦しい生活を送っていたという話は、島の子供たちは物心つくとすぐから聞かされている。そこへ豆でも送って来たとなれば、お常は島の恩人ではないか。

「馬鹿こくな。お常の話は江戸時代だぞ。婆は明治十七年生れた。間違うでねえ」

「そんならオオヨン婆は学校へ行ったのか」

「おお。当り前だ」

「オオヨン婆は、勉強ができて、二回も飛越しただぞ。一年生から、すぐ三年生に飛んだだ。そうだなあ、オオヨン婆」

梅子が友だちに自慢して吹聴した。

「本当か」

「本当だども、十歳^{とお}で一年に上っただからよ、勉強ができて自慢にならねえ」

「なして十歳^{とお}まで学校に行かなかったか」

「わしらの頃は、幾つで上るか、あまりはつきりしてなかっただ」

「なして」

「なしても、そうだんきや」

さっきから黙りこくっていた男の子が、このときようやく口の中から栗の甘皮を吐き出して、長い間の疑問をオオヨン婆に投げかけた。

「島が今より貧乏だったなんて、俺には分らねえな。こんな不便でよ、何もねえところはないと云うぞ。父ちゃんも、兄ちゃんも云うだぞ。オオヨン婆、本当に昔は今よりもっと何もなかったか」

「なかったとも。俺が、お前たちのように小^{ちひ}さい頃でも、島は今より貧しかっただ。船は今より小さい船でよ、減多にゃあ来なかったぞ。今はお前、昔とは較べものにならねえほど便利になつてるだぞ」

「なして」

「水道も電気も、七年前から出来たでねえか。俺たちは山の水を汲んで、桶を頭にのせて、日に何十遍て運んだものだ。しまいにゃあ首が肩の中にめりこむかと思つたぞ。機織りしても日暮れにゃあ止めねばなんねえ。夜はカツオドリの脂をとぼして夜業したが、あれは暗いものだぞ。今はお前、どんなときでも捻ればぱつと明りがついて、文化だんきや。東京と同じだぞ」

子供たちが噴き出した。そして俄かに反論してきた。

「なにが東京と同じだ。オオヨン婆は東京を見たことがねえからそんなこと云うだぞ。東京にゃあ自動車があるだぞ。ビルがあるだぞ。ハイヒールで歩けるだぞ。島にはねえものばかりだんきや」

「ビルて、なんだ」

「でけえアメリカ式の建物だ。十階まであるだぞ。エレベーターが動くだ。うちの兄ちゃんが修学旅行で乗ったと云ったぞ。東京にはデパートもあるだぞ」

「それでもお前、島の家はどこでもテレビがあるでねえか。それで東京でも、アメリカでも、坐つていて見える。文化でねえだか」

「それならオオヨン婆、なして兄ちゃんも姉ちゃんも中学卒業すると東京へ出てしまふだ。俺たちも学校にいる間だけだぞ、島にいるのは」

「出るでねえ。出ることはねえだ」

「笑われるぞ、オオヨン婆。卒業して、島で何するだ。仕事が何もねえだぞ。なして米買うだ」

「ツゲを育てて売ればいいだ。御蔵島は昔からそうして来ただ」

「そうして貧乏して来ただ」

子供がまぜり返して、わっと笑い出した。しかしオオヨン婆は、むきにもならず、栗の皮の焼け焦げでまっ黒になった掌を、はたきながら立上り、枯枝を拾い上げるとタミの木の根元の残り火を叩いて消し始めた。子供たちは栗の実を口に押しこんで、もぐもぐやりながら見物している。火が消えたかどうか、オオヨン婆は掌を灰の上にかざして念入りに熱の工合を見ていたが、やがてバケツを持上げると注意深く根元に水をかけた。ときどきジュッと音がするのは、小さな残り火がある証拠だ。根元に蒸気の白い煙が湧いた。

オオヨン婆が、またバケツを下げてボロ沢の方に水を汲みに行くらしいのを見てとった子供たちは、もう火は消えているのに、まだ水がいるのかと驚いて訊いた。

「消えていても、よく消さねばなんねえ」

オオヨン婆は、重々しく答えた。

「消えてても、消すだか」

子供の一人が婆の説明を面白がって繰返した。すると子供たちは、またわっと笑った。

「何を笑うことがあるものか。米粒一つの火でも残しては山火事のもとになるぞ。山が燃えていいものか。御蔵みくらの御山おやまは宝の山だ」

「ツゲとクワがあるからか」

「そうだんきゃ。ツゲはお前めえ、金きんと同じ値打のある木だぞ。それが御蔵の山には、びっしりと植わっているだぞ。クワはお前、大正天皇の御大典にも、今の天皇陛下の御大典にも、東京から献上した名

産だぞ、名木だぞ。御蔵のツゲとクワはお前、日本一の上物だぞ」

それを焼いてはならないから、山で火を使った後始末は、念には念を入れて消さねばならないのだと、オオヨン婆は、また下草を掻き分けてボロ沢へ降りて行く。

子供たちは焼栗を食べてしまうと、梅子をうながしてオオヨン婆の背負い籠の中を改めさせた。オオヨン婆の籠は魔法の籠で、ありとあらゆる物が入っている。子供たちにとって、山でオオヨン婆に出会うのは何より楽しみだった。手拭。古新聞。マッチ。手鋏。斧。鎌。山刀。除虫剤。化学肥料。古雑誌。鉛筆と古い手帖。そういうものがごった返している中で、角砂糖とか、炒り豆、乾燥芋、ときにはキャラメルなどが大きな風呂敷にぐるぐる巻きになって押しこまれてあるからだ。梅子が上から一つ一つ取出していくのを、子供たちは固唾を呑んで見守っている。

「あったぞ」

「なんだ」

「まだ分らねえ」

見覚えのある木綿の風呂敷包みが出てくると、中身の分らないうちから子供たちはもう腰を浮した。

「焙烙焼きた」

小麦粉に鶏卵と砂糖を練りこんで、子供の掌ほどの大きさに焼いた菓子が三つ、風呂敷にじかに包んであった。梅子が馴れた手つきで一つを二つに割っては子供たちに渡して、最後の半分を自分も口にくわえ、他に出したものを乱暴に籠の中に投げこんだ。それで子供たちは一斉に、ヨモギ摘みにボ

ロ沢へ駈け降りて行く。

途中で梅子はオオヨン婆が水の入ったバケツを提げて戻ってくるのに出会った。黙って彼女は、曾祖母のバケツを受取りタミの木のところへ戻った。二人とも口をきかない。籠の中の焙烙焼きをもたらったと云わなくても、オオヨン婆はもう子供たちが取って行ったのは先刻承知だし、だから札心に梅子がバケツを持っても、有難うとも言わない。

火が完全に消えたのを認めると、オオヨン婆は籠の中のものをバケツに詰めて、それからそのバケツを籠の中に藏い、それを背負った。梅子の姿は、もう見えなかった。

ボロ沢の水べりで、子供たちは黙々としてヨモギを摘んでいた。木々の間から抜け出た風が、水べりでは更に冷たい。

「帰るぞ」

オオヨン婆が呟くように云ったので、子供たちには聞こえなかったのだろう。誰も答えるものはない。しかし婆は平気で、ボロ沢からは細いながらもはっきり道跡のついた山路を、下り始めた。

三十分ほどで、道は急に明るくなった。オオヨン婆は傍にある小さな石積みの前で両手を合わせると、そこに供えてある数本の草の中から一本を取上げて背中の中へほうり投げた。これが、草祀り神さまなのである。山へ入る前に、草祀り神さまに草一本を供えて山行きの無事を祈り、山から帰るときには捧げた草を取って御加護に感謝するのが、この島の人たちの山人りの作法であった。

オオヨン婆は、草祀り神さまの前で一休みすることにした。背負い籠をおろすと、道端の叢に蹲くさむらって婆を埋めてしまうような深い草々の中から、アシタバの新芽を摘みにかかった。